

ベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲演奏会フィナーレに寄せて

〜終わりは新たな始まり

きしちほみ
来住千保美

音楽家 / 音楽ジャーナリスト。ドイツ在住。



第3幕 2019年1月16日

ウェールズ弦楽四重奏団によるベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲演奏会が3年10カ月の時を経て、いよいよフィナーレを迎える。これは快挙だ。

計画時から4年以上、この時間は長い。この間、世界は激変した。4年前、いや昨年、第4幕時に、世界中の誰が今日のコロナ禍を想像しただろうか？

弦楽四重奏演奏会の実現は難しい。理由は簡単。演奏者、聴衆、主催者すべてにとつて難しいジャンルだからだ。しかし、あえてこの困難に挑戦し、フィナーレを迎える。これは、芸術への尊敬と愛情に支えられた真剣さと誠実さなしには不可能だ。すべての人に、心から大きな拍手を贈りたい。そして、第6幕終了後には、誰もが新しい世界を感じ、将来へ向かう新しい力を持つだろう。芸術作品はそのような力を持つているのだ。

さて、ウェールズ弦楽四重奏団の優秀な音楽家4人は、30歳という節目の前後に、この大仕事に取り組んできた。それ以前、彼らは弱冠



上から第1幕～第4幕

©Beethoven-Haus Bonn



メーラーが1804年に描いたベートーヴェン34歳の時の肖像画。ベートーヴェンはこの絵をとてても気に入り、死ぬまで大事に所持していた。

20歳前後でARDミュンヘン国際音楽コンクール2008年の弦楽四重奏部門第3位という素晴らしい成績をおさめている。彼らの入賞はドイツの全国ニュースでも大きく報道された。ちなみに、世界中の音楽コンクールの中で、このコンクールはその最高峰に位置づけられる。

では、30歳頃のベートーヴェンの状況はどうだっただろうか？ ベートーヴェンはこの頃、今回の第5と6幕で演奏する弦楽四重奏曲第1番と第4番を作曲した。『不滅の恋人』『ジヨゼフィーネ・ブルンスヴィーク』と出会ったのもこの頃だが、一方、聴力の劣えが激しくなり、絶望し、31歳の時に遺書を書き自殺を考えた。しかし、その2年後には交響曲第3番『英雄』を作曲し、『傑作の森』時代が始まる。まさに喜びと絶望、そして復活の4年間だった。ベートーヴェンより1歳年長のナポレオンがフランス国内の改革を次々と推し進め、絶頂に向かってはく進んでいたのもこの頃だ。

『英雄』作曲の2年後には第7番『ラズモフスキー第1番』第6幕を出版、第10番『ハーブ』(第6幕)は第7番に比べるとピチカートなどの軽い『ノリ』でのびのびした感じがあるが、これ

はロブコヴィッツ侯たちから経済的保障を取り付けた明るい気分が反映しているかもしれない。スキップ(『ピチカート』)するルートヴィヒを想像するのも楽しい。

ベートーヴェンの作品に接するとき、『自由』と『解放』は重要なキーワードだ。旧弊にとらわれず、冒険を厭わず、将来を見据える。第11番(第5幕)でベートーヴェンは様々な実験を試み、600ページの草稿を基にした第14番(第5幕)は、すべての既成概念から解放され、自由自在だ。

始まったものは終わる。しかし『終わりは始まり』だ。私たちがみんなの新たな挑戦を楽しみにしたい。そして、もうひとつ重要なキーワード『Freude(歓喜)』。『第九』で高らかに歌われる『フロイデー!』だ。困難の先には歓喜が待っていることをベートーヴェンは謳っている。

DATA

iichiko presents ベートーヴェン弦楽四重奏曲 全曲演奏会

第5幕... 9/28(月) 第6幕 FINAL... 11/12(木)

▶ iichiko 音の泉ホール

※各19:00開演 ¥[全席指定]一般 3,000円、U25割1,500円、第5幕・第6幕のセット割5,500円、友の会び割あり 出 ウェールズ弦楽四重奏団 曲(第5幕)第1番 ヘ長調 作品18-1、第11番 ヘ短調 作品95「セリオン」、第14番 嬰ハ短調 作品131 《第6幕》第4番 ハ短調 作品18-4、第10番 変ホ長調 作品74「ハーブ」、第7番 ヘ長調 作品59-1「ラズモフスキー第1番」 出 iichiko総合文化センター [(公財)大分県芸術文化スポーツ振興財団] Tel:097-533-4004